＜西郷隆盛という人生＞

今日私達は「政治家・西郷隆盛」を観ている……が。ここに至る迄の西郷の人生を概観してみたい。

西郷 隆盛

西郷は文政１０年（１８７２年）１２月７日、鹿児島城下の「下鍛冶屋町」に生まれる。西郷家の家格は下層に位置する御小姓与（おこしょうぐみ）で、父の吉兵衛は「勘定小頭（かんじょうこがしら)」という役職にあった。故に西郷家は大きな借金（水引村の豪農・板垣与三郎から１８４７年と１８４８年の二度・計２００両を借り、明治政府の参議筆頭となった１８７２年にようやく返済することが出来た）を抱えており、隆盛（幼名吉之助）は貧しい家に生まれた。

父は会計係で、骨格逞しく、正直者で真面目だけが取り柄の人物であった。それに対して、妻は家柄が良く、お嬢様で、頭が良く、その上美人で評判だった。西郷の顔立ちは目が大きく、彫りが深く、多分に母親似であったようだ。家柄も頭も良く、家事も巧みな女性と、真面目なだけで一向に出世しない夫だが、夫婦仲が良い二人に、「無敵斉」の如きサラブレットが生まれたのである。

弘化元年（１８４４年)、数え１８歳で薩摩の農政職の一番下の役目である郡方書役助（こおりがた、かきやく、たすく）の役職を得、以後１０年間この仕事を務める。若き西郷はこの経験から、農業や農村の実情を知ることになり、彼の思想形成に大きな影響を与えたといわれている。

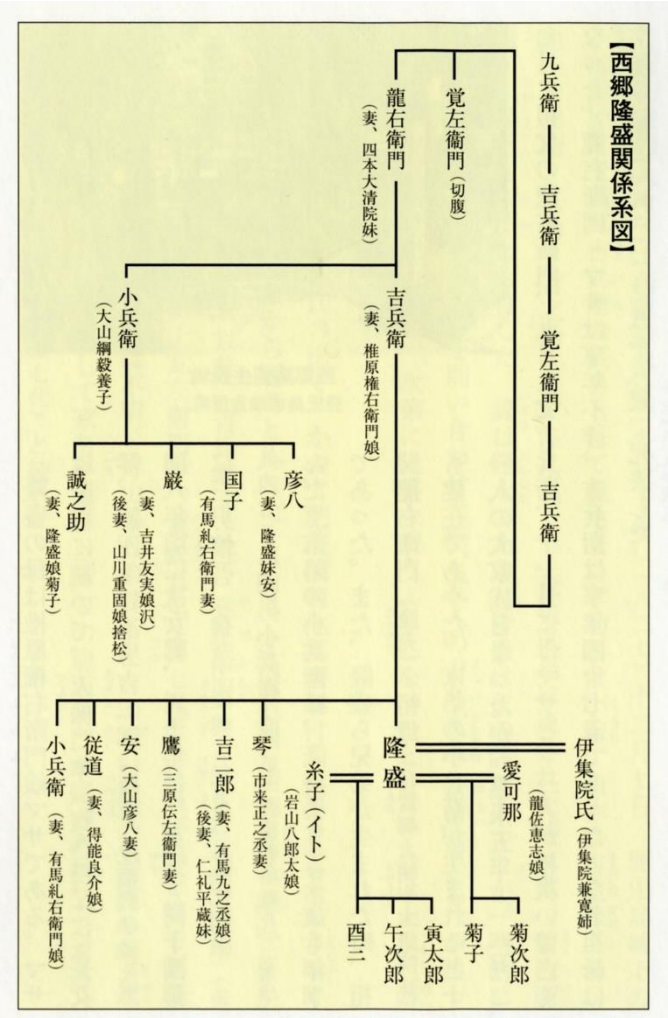
離島の過酷な生活状況を知り、沖永良部島時代には対策として「社会趣旨書」示すなど、農民に気遣う思想の核は離島時代の体験から生まれたものであろう。商品経済に対する警戒感もこの時代に生じたものであろうか？

奄美群島に属する沖永良部島

小さな下加治屋町から大久保利通・大山巌・西郷従道・山本権兵衛・東郷平八郎等、後の明治維新の舞台で活躍し、政府の高官となるような人物が数多く（２０数人）生まれ育っている。幼年時代には藩の儒学者 松本氏について漢学の素読を学び、藩校「造士館」では軍書読みに興味を持ち、三国志・呉越軍談・太閤記・甲越軍記など愛読し、赤穂義士伝・曽我兄弟仇討ち（５月２８日）の「曽我物語」等の輪読を徹夜で行ったりしている。

西郷家はその先祖を名族「菊池氏」に発し、西郷九兵衛が元禄の初め頃、島津家に仕えたのが始まりで、その子孫の「無敵斎」吉兵衛、（七尺　２００㎝の長身で武芸・力量とも城下に敵なしと称せられていた）を目標として育てられたのが西郷であった。西郷の勉学修練は王陽明の「伝収録」、佐藤一斉の

「言志録」を愛読、後に京都の春日潜菴にも師事している。



当時の友人としては、大久保利通・有村俊斉・伊地知正治・吉井友美・税所篤等が挙げられる。当時の下加冶屋町に多くの偉人が育ったのは「無参和尚」の影響が大きいと言われている。彼は高徳僧であり、勤王僧としても名声が高く、西郷等はここで高い禅の境地を得たと思われている。

これら同僚の間で特に頭格を現していた者は、西郷・大久保・有村・有馬一郎・伊地知などであったが、特に西郷は斉彬公にその素質を認められ、中央に出て勤皇志士と交わる機会を得て国事に奔走することになる。主な勤王の志士とは、先輩としては「水戸の藤田東湖」・同僚としては「越前の橋本左内」が有名である。

島津 斉彬

「西郷は、幼少時は無口で、どこか昼行灯の観があった」。「同年代では片足と片目が不自由だった伊地知正治は、同僚の間では戦略家として一目置かれ」、「実行家としての大久保が一目置かれていた」。幕末維新にしても、この三人の連携は変わらず、幕府を武力で倒さない限り新時代は来ないと見抜いており、それを具体的にどう成し遂げるかに関しては、戦略家の伊地知や、実行家の大久保が上手であったと言われるが、大方針を決定するのは常に西郷であった。

西郷が作った国家に、自ら何故反逆したのか？　恐らく遣韓論と征韓論という世界情勢の見方の違いから生じた国家観・世界観が大久保との距離を広げ、その結果、西郷にとっては、日本政府による将来の国家像に対する大いなる失望という結果を引き起こしたのが遠因になったのであろうか？西郷は当時の日本をどう観ていたのか・何を訴えたかったのか？それを知る為には「南洲翁遺訓」を精査する事によって明確となろう。

＜気宇壮大な思想家、西郷を知る為の素顔について＞

毎月２０日には鹿児島から５里（２０㎞）離れた惟新公（島津義弘）の菩提寺である妙円寺に各法限（ほうぎり＝城下武士の居住単位）の少年達が参詣する風習があった。西郷を含めて、薩摩武士の精神性を考える上で重要なのは、薩摩藩中興の祖、日新公の「いろは歌」の教えを子供の時から毎日唱え続け、心を磨いて育った、凄まじい教育である。鹿児島県加世田にある竹田神社に日新公（忠良）は祀られている。

その教えの例を挙げると、

（い）いにしえの道を聞いても唱えても、我が行いにせずばかいなし。
（ろ）楼の上も、はにゅうの小屋も、住む人の心にこそはたかき、いやしき。

昔にこの様な人間平等を説いた歌も珍しい（御殿に住もうが、小屋に住もうが、人間の心次第で貴賤が決まる……の意）。維新の功業を共にした人達が「いろは歌」の『ろ』の教えに背いて、次々と巨大な家を建て、二号さんを囲ったりしている現実に嫌気がさして薩摩に帰ってしまったのは、新政府との戦いに至る大きな要因になったと思われる。

現在の竹田神社

西郷は「俺はこんな政府を作る為に維新を戦ったつもりはない」と側近に呟いたと伝わっている。西郷は人の気持ちが分かり、人の気持ちに寄り添えたが、その点、大久保にはその賢さに感心させられる反面、他人に「自分とは違う」という気持ちを起させてしまう所があった。ここが西郷との大きな違いであり、常に正解を出し、行動に移す冷徹な大久保より人望があったのは当然であったろう。このような精神を持つに至った原因は、若き頃役職として農民の悲惨な実状に接した事である。

西郷家の草履取りの下男だが、なかなかの人物であった「休我」という人物が居た。体格が良くて意地ばかり強く、学問や稽古より実践と行動という吉之助（小吉）の態度に危機を感じ、忠義心から吉之助を直接に難じた。武士の社会では、いかに子供といえども、下男が主人側を批難するなど許される事では無かった。吉之助は「下男の分際で主人筋を侮辱するなど、捨て置かぬ」と怒って休我を討とうとして、立ち回りが始まった。驚いた母が「吉之助なにをする!」と間に入り、下男に小声で「すまぬがちょっとだけ殴らせおくれ」と言

った。しかし休我は「それはいけません。若様の為を思うから言ったまでで、自分が叩かれるのは道理が通らない」と抵抗した。当時の武士の世界に、人間平等などあるべくもないが、西郷家ではそれが通ったのは驚くべき事である。吉之助も非常に勘の良い人間であったのだろう。休我のような下男だが、筋を通す人物に何かを感じたのであろう。下男との触れ合いを通して、次第に庶民の力強さと「人」としての真っ当な発想の大切さ、農民も武士も同じ人間で貴族とも違いはない!!という思想を形成していったのである。気骨のある人物であった下男、休我の存在は吉之助に大きな影響を与えたことは特筆すべきである。西郷家は下男の休我を家族同様に遇したのであった。

郡方書役助（こおりかたかきやくたすく）時代、書記官迫田利済（としなり、通称 ： 太次右衛門（たじうえもん､）から清貧な奉行（後に郡方横目《検察官》に昇進）と言われ、又、仁愛の人で領民に慕われた。迫田は民を苦しめ私利を肥やす税吏が多い事を嘆き、「武士など虫みたいなもの、草の根の民こそが重要で、草の根を絶てば武士も枯れて倒れるんだ」‥‥と説いた歌を残し、西郷も「草の根の民、農民」に敬意と慈悲の心で接した。しかし西郷は、百姓が実は大切にされておらず、百姓の犠牲が前提で武士の生活が支えられている現実に気付き、この辺りから西郷は学問への異様な傾倒ぶりが始まった。

聖光寺の無参禅師、還暦に近い有馬一郎という藩内の事情に通じた学者から学び、早くから藩の政治情勢を知り、お由羅の専横を知る。又、伊藤猛右衛門から陽明学の「伝習録」を、朱子学者の佐藤一斉の著「言志四録」を学び、「平田国学」で近代的知識と精神を身につけた。他には米沢藩の上杉鷹山を育てた「細井平洲」の本を愛読していた。自分も鷹山のように、民が飢えないような政治を行うようになりたいとの気概が感じられる。

西郷の生涯の友は、無参和尚の甥の吉井幸輔（友美)、伊地知正治、税所長藏（篤）であり、無参和尚のもとで一緒に勉強している。和尚はこの三人に次の如く国家の形勢について説いている。「今の平和がいつまで続くか分からない。異国船がやって来て、外国人が侵略してくれば、国内はついには麻の如く乱れるだろう。その時に及んで慌てても仕方がない。お前たちは今から『力』を養い、ことがある時に備えなさい」……と。この三人が当時から若手改革派として期待されていたのは、無参和尚の影響である。吉井の孫は歌人で有名な吉井勇、税所は奈良県知事を務めている。

第２７代当主、斉興（なりおき）の奥方は因州（鳥取池田藩主）の御姫様

で、すこぶる賢明な人、その間に又三郎が生まれる。後の島津家随一にして近代の名君斉彬公となる若君で、その聡明さは母親の血筋が大きいとされている。

斉興公三男久光の母親が、側室お由羅である。江戸麹町の八百屋の娘であった。「お由羅の方」は久光を世次に立てようとして、斉彬を藩主に立てたい高崎五郎右衛門（男爵、高崎正風の父）はじめ、大久保次右衛門（正助の父）、吉之助の師である有馬一郎、赤山勒負（ゆきえ＝斉彬の側近で、家柄も良く、斉彬派の中心人物）等はお由羅派の毒殺を恐れ、主だった２４人が家老島津壱岐の家に集合し、久光派の密謀を打ち破る議論を行った。ここでお由羅の方が福昌寺に詣でる予定があり、途中の吉野の原で待ち伏せて、赤松という武芸力量に優れた者が一人、責任を負って射殺する計画が決定される。

しかし当日、この暗殺計画が露見する。斉彬派の一人、牧某は気の弱い男だったらしく、もし赤松が射（い）損なって捕らえられたら我が命も危い、そう思うと不安でたまらなくなって、赤松の働きを見る為、家を出ようとした。その時、城下一の美人と言われた妻が何も知らずに自分の衣を縫っている様子を眺めているうち、ポロリと涙を落してしまった。怪しんだ妻が「あなた、今日は様子がおかしいですよ。何の用事で、どこに行くのですか？ 」と問いただした。牧は、最初は隠そうとするが、とうとう計画の仔細を妻に告げてしまった。嘗て奥に奉公して、お由羅の方に愛され、久光をこの上ない若君だと思っていた牧の妻は大いに驚き、「たとえ計画通りお由羅の方を殺すことが出来ても、それで話が済むものではない。ことが露見すれば関係者一同皆殺しされて、貴方も犬死にになる、あなたは忠節と言いますが、お由羅の方を殺したら藩主がどれほど嘆き悲しむか。主君を嘆き悲しませるのが忠節ですか？よくよく考えて下さい」……と。

ただでさえ気の弱い牧は、赤松が一人責任をとる計画も忘れ、妻の説得にたちまち変心し、久光派の頭目、島津豊後（ぶんご＝島津斉興の腹臣）のところに行って密謀を訴えた。多くの斉彬派は自決し、他は遠島となる。同志の中でも忠勇義烈で知られた赤山靭負（ゆきえ）の存在は、西郷にとっては大きなものであった。西郷は父が切腹の介錯をした血染の肌着を大切に保存し、赤山靭負（ゆきえ）の真心を、志を継いで、斉彬公が本意を遂げるよう、忠義を尽くす決意をする。藩主斉興は深く感じるところがあり、再び争いが生じぬように、嘉永四年に嫡男・斉彬に家督を譲り、自ら隠居した。

斉彬と西郷の邂逅は、郡方書役助時代にしばしば藩主に上申書を建白し、又お由羅騒動の彼ら憂国の志士達の免罪を請うた故に、斉彬が西郷の名を知った縁となったのであった。

嘉永六年（１８５３年）六月ペリー来航と共に能力ある武士たちは国事に奔走し始める。西郷も斉彬出府の合わせ江戸行きを決定する。その離別の夜の杯を汲もうと家の者達を集める。しかし老僕の権兵衛が風邪の為姿が見えない。驚いた西郷が近くにある権兵衛の家を見舞うと、権兵衛は涙を浮かべ「図らずも病のせいで、若様の門出を拝むことが出来ないのを残念に思っていましたが、こうしてお顔を見ることが出来、もはや死んでも思い残すことはありません。明朝のご出発でさぞ御用も多い事でしょう。早くお帰り下さい」……と。しかし西郷は枕元を去ろうとしない。「父母亡き後、私達を助けて下されたあなたの苦労は実の親とも思って頼りにしていたのに、病気のまま後に残して江戸に行くのは悲しい。明日出発したら、いつまた会えるかもわからないから、せめて今晩だけは看病させてもらいたい」。そう言って権兵衛の制止も聞かず終夜看病したという。

その頃の武士にすれば、下男などごく軽い存在であろうに、西郷は下男の枕元で大切な出発前夜を過ごしていたのである。すでにこの頃から西郷には「人間平等」の行動が見える。人をいたわる心を持っていたのだ。権兵衛は無論、話を聞いた近隣の者は皆、西郷の徳を慕い、西南戦争でも三州（薩摩、大隅、日向）の子弟達が西郷の為に命を捨てた。今尚、西郷の徳を慕うのは、この様な慈しみと思いやりの逸話が多いからなのである。

安政元年（１８５４年）正月、西郷は念願かない、斉彬公のお供の列に加わり、勇んで鹿児島を出発した。当年２６才での蛟龍池中（こうりゅうちちゅう＝英雄豪傑が時運を得て、その才を発揮する喩え）、維新の英雄としての西郷の活躍はこの江戸出府の時から始まるのである。

平成３０年９月２３日

志雲会代表　有　馬　正　能